

浦島伝説の系譜を比較する古典授業

——対面授業と遠隔授業の実践を通して——

荻田みどり¹

要旨…本稿では、浦島伝説の受容の様相を比較する古典の授業実践について報告する。二〇一九年までの三年間の対面授業、二〇二〇年の遠隔授業に基づき、古典授業の意義を見直すとともに、遠隔授業における実践の可能性を示す。

キーワード…浦島伝説、古典授業、グループワーク、遠隔授業

1・はじめに

浦島伝説は、古くは奈良時代に成立した『丹後国風土記』逸文などに記事があり、舞鶴工業高等専門学校（以下、本校）の位置する丹後国にゆかりのある伝説である。『源氏物語』や『平家物語』にも浦島伝説を踏まえた表現が見られるほか、説話や歌論書などのテキスト作品はもとより、能や歌舞伎という舞台芸能に取り入れられるなど、現代に至るまでさまざまな形で受容されてきた。近年では、KDDI株式会社のコンシューマ事業ブランドauのCMキャラクターとして登場している。これほど古くから多岐にわたるジャンルに波及して、絶えず受容されてきた作品は、実は珍しい。

執筆者は、二〇一七年から二〇一九年までの三年間に、本校一年生を対象とした古典の授業において、浦島伝説の記されたテキストを比較するグループワークを実施してきた。古典がいかに現代まで形を変えながら受け継がれてきて、現代でも創作の糧になっているかを知ることが、入学したばかりである一年生が古典学習の意義を理解することにもつながる。その上、本校は京都府内だけでなく、滋賀県や兵庫県、大阪府など、他府県から入学してきた学生も多い。舞鶴のことについてあまり知らない学生にとっても、これから五年間を過ごす舞鶴という土地について興味を持つ良い機会になると考える。本稿では、古典授業の導入として位置付けたこの授業の取り組みを紹介する。

また、二〇二〇年度は新型コロナウイルスの影響により、本校では六月まで

遠隔授業を余儀なくされた。そこで、Microsoft OneNoteやTeamsを用いて、同様のグループワークを試みた。一度も対面したことのない、パソコンの操作に慣れていないかもしれない一年生に対して、どのような方法が取れるか試行錯誤した取り組みの方法と課題を述べる。

2・授業の流れと浦島伝説の概要

まず、浦島伝説に関する授業の流れを説明する。浦島伝説に関する授業は前期第一回授業より一授業時間九十分×全約五回半で実施している。次頁の表1に前期中間試験まで七回分の概要を示した。

最初の三回は一授業時間を大きく二つに分けて進めた。前半は授業のガイダンスや小テスト、古典文法の基礎知識等の説明、後半は『御伽草子』所収「浦島太郎」の冒頭部分の読解を通して、現代語訳の仕方や、前半の学習内容を活用しつつ現代語訳をする上で重要となる文法の説明を、講義形式で行った。

「御伽草子」は、広義には室町時代から江戸時代初期にかけて作られた短篇の物語の総称を指す。平安時代以降作られた物語文学よりは庶民などにまで広く流布し、その数は五百編にも及ぶという¹⁾。狭義としては、江戸時代中期、

¹ 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 講師

表1 授業の流れ(前期中間試験まで)

前半		後半	
第一回	授業ガイダンス、仮名遣い、辞書の引き方	『御伽草子』文学史、音読、本文写す、語句の意味調べ	
第二回	小テスト、言葉の単位、活用形	『御伽草子』『浦島太郎』冒頭	
第三回	小テスト、四段・上下二段活用	『御伽草子』『浦島太郎』冒頭	
第四回	小テスト、上下一段・変格活用	グループワーク	
第五回	小テスト、グループ発表		
第六回	小テスト、グループ発表(残り)		
第七回	別単元	別単元	

大坂の渋川清右衛門によってそのうち二十三編が選ばれて出版されたものを指す。二十三編の中には、「一寸法師」や「鉢かつぎ」など、昔話としてよく知られた話もあり、「浦島太郎」もその一編である。この出版により、「浦島太郎」はより広範囲に共通の話が広まった。

ただし、これは我々が現在知る浦島太郎と、相違点も多い。たとえば、書き出しは「昔、丹後国に、浦島といふ者侍りしに、その子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。」⁽²⁾とある。「丹後国」という具体的な地名が記され、浦島という者がいてその子が浦島太郎であるというように、親の説明から入る点も異なる。さらに、二十四、五歳という浦島太郎の年齢まで明らかになる。その後の筋立てでは、浦島太郎が亀を釣り上げ、放してやることについて恩を感じると言い放つ。いじめられている亀を助けたわけでもなく、亀の背に乗って竜宮城へ行く流れでもなく、翌日小船に揺られた女が浦島太郎のもとにやって来る。『御伽草子』は比較的簡便な文章で書かれているため、現代よく知られる話との違いを実感することができ、古典授業の導入として適当である⁽³⁾。

現在よく知られた「浦島太郎」は、国定教科書の影響によるところが大きい。全国一律の国定教科書に掲載されたことで、共通の「浦島太郎」が広まることになった。明治三十七年(一九〇四)の第一期には冒頭の簡単なあらすじのみ記され、明治四十三年(一九一〇)の第二期から、検定教科書へ変わる直前の第六期国定教科書まで、小学二年生用の『尋常小学校読本』で用いられ続けている⁽⁴⁾。現代の我々が共通の浦島太郎の話を確認しているのも、この影響下に

ある。「昔々浦島は助けた亀に連れられて」と謡った文部省唱歌の存在も大きい。これらの受容の流れの概略については、グループワークまでにプリントを配布して押さえた。同時に、文学における時代区分(古代・中古・中世・近世・近代)についてもここで確認している。

最初の三回の授業で基礎を押さえた上で、文章を詳しく読み解き、違いに注目できる術を学び、第四回でグループワーク、第五〜六回前半で発表を行う。なお、第六回後半と第七回は年度によって異なる作品を扱った。

3・グループワーク

3・1 グループワークの目的

次にグループワーク・発表の内容と目的を説明する。グループワークは、グループごとに担当作品を決め、各時代の浦島伝説を比較分析するものである。発表では、本文を音読し、分析結果を説明する。

目的は、大きく二点である。第一に、古典授業の導入として、歴史的仮名遣いに慣れることである。そのため、発表時に音読を課している。第二に、比較することで見えてくる「受容のかたち」を考えることである。グループワークでは、それぞれの作品同士、あるいは、我々がよく知る「浦島太郎」や江戸時代に出版されて以降広く伝わっていた『御伽草子』『浦島太郎』との違いを分析し、そこから見えてくるそれぞれの作品の特質を確認する。テキストを読み込み比較することによる気づきの重要性を感じられれば、今後の古典授業の取り組み方にも良い影響を与えると考える。他の教科にも通じる分析能力を養うことにもつながる。

なお、グループワークにすることで、古典に苦手意識を持つ学生たちも相談し合い、ここまでの授業内容の復習を行いながら取り組むことができるほか、比較分析に関して、多様な視点を共有し合うことができる効果を期待した。

3・2 作品選定

グループワークにあたって、以下①〜④の九つの作品を選定した。作品名と概略、使用テキストを示す。一年生でもある程度読みやすく、違いを比較しやすいものであることを重視した。ただし、浦島伝説の受容の系譜を押さえる上で外せないと考えられるものうち、文章量が多く馴染みのない言葉が多いものについては、現代語訳付きのテキストを配布した。

④『風土記』丹後国逸文（『新編日本古典文学全集』小学館、現代語訳・頭注付き）

奈良時代初期、元明天皇（在位七〇七・七一五）の詔により各令制国の国庁が編纂した地誌。主に漢文体で書かれた。

⑤『日本書紀』（『新編日本古典文学全集』小学館、現代語訳・頭注付き）現存最古の正史。舎人親王らにより、七二〇年成立。原文は漢文だが、テキストは漢字仮名交じりになっているものを使用した。

⑥『万葉集』（『新編日本古典文学全集』小学館、現代語訳・頭注付き）

現存最古の和歌集。七五九年以後成立。天皇、貴族から下級官人、防人など様々な身分の人が詠んだ歌の首以上が所収。原文は万葉仮名。

⑦『俊頼髓脳』（『日本歌学大系』風間書房）

源俊頼によって書かれた歌論書。一一一三年頃成立。

⑧『綺語抄』（『日本歌学大系』風間書房）

藤原仲実によって書かれた歌論書。一一〇七〜一一一六年頃成立。

⑨『和歌童蒙抄』（『日本歌学大系』風間書房）

藤原範兼によって書かれた歌論書。一一四五頃成立か。

⑩『八雲御抄』（『日本歌学大系』風間書房）

順徳天皇が著した歌論書。鎌倉初期成立

⑪『古事談』（『新日本古典文学大系』岩波書店）

説話集。源頼兼編纂。鎌倉時代初期の一二二二〜一二二五年に成立。奈良時代から平安中期に至るまでの四六二の説話を収める。

⑫謡曲「浦島」（『謡曲二百五十番集』（『日本名著全集 江戸文藝之部』第二十九巻）日本名著全集刊行會、二〇二〇年度の授業では私に現代語訳を付した）

作者不明。浦島伝説を題材にした創作。浦島明神参拝の勅命を受けた廷臣が、丹後の水江に赴く。

⑬⑭⑮までの九作品を、九つのグループそれぞれに割り振り、担当を決定した。ただし、⑬『風土記』は文章量が多く、⑭『日本書紀』は少ないため、『日本書紀』を担当するグループには『風土記』の後半も担当してもらった。遠隔授業を行った二〇二〇年度の場合は、作品途中で分けることが難しく、どのような回答を求めているのか例を見せる目的もあり、⑭『日本書紀』を例として荻田が担当し、残り八作品を八グループに振り分けた。

3・3 分析項目

各人に「比較表」を、各グループに「まとめシート」を配布した。「比較表」は、上記九作品に、比較対象として『御伽草子』を加えた十作品において、次の十一項目のプロットを書き込み一覧できるようにした表である（次頁表2）。

①時代区分（事前に学習した上代・中古・中世・近世という時代区分を意識させる）

②浦島太郎の名

③浦島太郎の住んでいた所

④浦島太郎の特徴

⑤亀の特徴

⑥女性の名称。特徴。浦島太郎との出会い（二〇二〇年度は「浦島太郎との出会い」を別項目に分けた）

⑦竜宮城の名称。場所。

⑧浦島太郎が故郷に帰り見た風景・人物

⑨地上での経過年数

⑩玉手箱の名称

⑪玉手箱の中身

⑫玉手箱を開けた後どうなったか

学生は自身の担当作品を読み取り、「比較表」の①〜⑫の項目にあてはまる内容を書き込み埋めていく。①②などは抜き出して書くことになるが、③⑦などは現代語で書いても構わない。文中に描かれていない項目については、その欄に斜線を引くよう指示した。「描かれていない」ということも特徴の一つであると伝えている。

一方、「まとめシート」には三つの設問を示し、話し合ってもらった。

1. 表において、現在よく知られている「浦島太郎」や『御伽草子』との最も特徴的な違いはどのような点か。

2. この作品のジャンルはどのような文章形式か。その特徴はどのような所に表れているか。

3. 表以外の箇所、特徴的なプロット（筋立て、文章の流れ）・表現はどのような点か。

表2 浦島伝説比較表 (すべて埋めた状態の例。明朝体部分II学生が書き込む欄)

時代区分	作品名	ジャンル	①浦島太郎の名	②浦島太郎の住んでいた所	③浦島太郎の特徴	④亀の特徴	⑤女性の特徴	⑥竜宮城の名称・場所	⑦浦島太郎が故郷に帰り見た風景・人物	⑧地上での経過年数	⑨玉手箱の名称	⑩玉手箱の中身	⑪玉手箱を開けた後どうなったか
上代	①『風土記』	地誌	筒川の嶋子、水江の浦の嶋子	与謝の郡・日置の里、筒川村	「姿容秀美れ風流なること類なし」	五色の亀 ↓婦人となる	婦人。亀比売 「美麗しくまた比ぶひとなし」	蓬山、仙都	「人も物も遷り易り、また由るによしなし」 郷人	三百余歳	玉匣	芳蘭之体	女にもう会えな いた後どうな ったか
	②『日本書紀』	歴史書	水江浦島子	丹波国余社郡管川		大亀 ↓女になる	女。 亀が化けた姿。 浦島子と夫婦になる	蓬萊山					
	③『万葉集』	和歌集	水江の浦島子	墨吉			海神の神の娘 子	常世、常世辺	家も里も見当たら ない			白雲	皴が寄り、白髪 になり、死んで しまった
中古	④『俊賴髓』	歌論書	浦島の子	みづの江の浦島		大きな亀	女。 浦島の子が寝 ているときに 亀から変身す る	えも知らぬ所			小さき箱	煙	老いかがり、 物も忘れてし まった
	⑤『綺語抄』	歌論書	浦嶋の子	みづの江		亀、美女に化け る	美女。蓬萊の神 女。 亀が変身 をとめ 神女	蓬萊		四五百年	箱	あかき雲	身が朽ちせま り、老いた
	⑥『和歌童蒙抄』	歌論書	水江浦嶋子	丹後国余佐郡	「若き童の」とし	大なる亀		蓬萊山	知っている人 は少ない。 老嫗	三百四十八年	玉匣	紫の雲	老たすみやか りに至りて行歩 にたへず
中世	⑦『八雲御抄』	歌論書	浦嶋の子	住吉の水の江			神女	とこよの国わた り海のみやこ、 蓬萊	故郷を見て、誰 にも会わな かった		箱	白雲	白髪、年もよ り、命も尽きた
	⑧『古事談』	説話集	浦嶋子	丹後国余佐郡	「幼童の如し」	(浦嶋子伝・霊 亀)美女となる	神女 (浦嶋子伝・美 女、蓬萊山の 女。玉顔の艶： 未だ翔らず)	西(浦嶋子伝・ 蓬萊山・蓬萊宮)		三百年	玉匣	紫雲	
	⑨『浦島』	謡曲	浦島の明神	丹州水の江		五色の亀	仙女	蓬萊			箱、玉手箱		
中世〜近世	浦島太郎	御伽草子	浦島太郎	丹後国	二十四五歳	亀	「美しき女房」 小船に乗り本 国へ送ってほ しいという。実 は龍宮城の亀。	龍宮城	「虎ふす野辺」 「八十ばかり の翁」	七百年以上	「玉手箱」	「紫の雲三す ぢ」	翁の姿 ↓鶴になる

設問2にある「ジャンル」は「比較表」にあらかじめ提示している。どうい
うものであるかは学生に調べさせた。ジャンルを押さえることで、その文章全
体がどのような意図で書かれているかを押さえ、その文章形式の中でどのよう
に浦島伝説を表現しているか、ある程度の傾向がつかめると考える。

たとえば、『日本書紀』は「秋七月に、丹波国余社郡管川の人水江浦島子、
舟に乗りて釣し、遂に大亀を得たり。」という一文で始まる三文のみの記事で
ある。これは雄略天皇二十二年の「秋七月」のことであり、正史である『日本
書紀』が天皇の時代に沿って編年体で書かれている形式に基づく。『万葉集』
では長歌に反歌が付随していて、その様式を押さえる必要がある。歌論書は、
和歌が一首取り上げられ、その和歌に対する解説として浦島伝説が記されてい
る。そのため、浦島伝説のうち和歌に関わるくだりは詳しく述べ、和歌に関わ
らない部分は省略するなど、歌論書であるがゆえの語り方の特徴がある。

3・4 発表の方法

発表する内容は以下の通り指示した。

① 比較表を黒板に示す。

② 本文音読とともに、違いについて論点をまとめて発表する。

※どのように発表するか、音読する係、論点を発表する係など分担を決め
ても可。音読は複数人で読むのも可。

※グループ内の全員が何かしらの役割を受け持つこと。

「比較表」を黒板に示すことは、割合時間がかかるため、三グループ程度一
斉にチョークの色を変えて書かせ、その後一グループずつ発表する形式を取っ
た。他グループの学生には、黒板に書かれたものを自分の「比較表」に書き写
すよう指示した。それぞれの発表を聴いた上で、再度九作品+『御伽草子』を
一覧し、比較して見えてくるものを考えてほしかったためである。勿論、誤り
があれば、発表後にこちらで指摘する。

音読を課すことにより、歴史的仮名遣いに慣れるだけでなく、文章の持つリ
ズム感を感じることができる。特に、『万葉集』や謡曲「浦島」はリズムが重
要である。読めない言葉や分りにくい言葉については、グループワーク中に
巡回しながら適宜質問に答えた。古語辞典を引くことも推奨していたが、学生
の持つ古語辞典には掲載されていないような難解な語句もあるためである。

さらに、スマートフォン等電子機器の使用
を許可し、古語辞典にも掲載されていないよ
うな、竜宮城にあたる場所、「常世」や「蓬
萊」がどのような場所なのかを調べる学生も
いた。違いを分析しての発表については、多
くが「まとめシート」を読み上げる形をとっ
ていた。

五分間の発表後、授業担当者から数点質問
を投げかけた。それにより、発表者が気づけ
なかった点や興味深い点についてフォローを
加えた。テキストを読み込んでこそ分かる
という点を重視した。歌論書では、和歌中の「あ
くる」が、箱を「開くる」と夜が「明くる」
の掛詞になっているという説明を補うことが
多かった。

謡曲「浦島」では、地唄に「海士ならぬ身も袖濡らす旅衣。海士ならぬ身も
袖濡らす旅衣。幾野の道の遠ければ。まだ踏みも見ぬ蜃人の。」というように、
『小倉百人一首』にも所収される小式部内侍の歌「大江山いくの道の遠けれ
ばまだふみも見ず天の橋立」を踏まえた表現が見える。その上、「開ける」「明
ける」の掛詞を踏まえて、玉手箱を開ける話題から、天の岩戸神話の挿話を盛
り込む点も面白い。天照大神が天の岩戸に籠り、歌や舞につられて出てきたと
ころ夜が「明け」という話である。謡曲「浦島」は、通常の浦島伝説を語る
のではなく、勅命を受けた廷臣が、神となった浦島明神に詣でるといふ浦島伝
説の後日譚のような創作であり、なかなか内容をつかみにくいものの、フォロ
ーを加えることで、様々な言葉遊びに気づく。「大江山」歌や天の岩戸伝説は
知っている学生もあり、現代語訳では味わえない本文を読む面白さを感じるこ
とができるだろう。

4・学生の反応

学生には、他のグループの発表を聴いて感想を書くよう、用紙を配布した。
自分の担当した作品を他の作品と比較してみ、気づいたことや考えたことな
どを書き、発表終了後に提出させた。出てきた疑問点等は後日プリントに抜粋
してまとめるなど、フィードバックを行っている。



図1 発表の様子

学生の感想は、これまで当たり前だと思っていた浦島太郎の話が覆されたことへの驚きを感じているものが多く、自身が読み込んだ担当作品と他作品とを比較し、多くの違いが見えてくることに興味を持ってくれているようだった。一部を抜粋して示す。

時代が現代に近づくにつれ、引用や、話を飛ばすことが多くなっているの
で、浦島太郎の話が一般に広く知られていったことがわかる。

(二〇一七年度)

各作品は似ている点もあれば、まったく違うところもあり、自分が幼少期
に何回も読み返していたこの童話が、こんなにも種類があるとは知らな
かったので、読んでみて、どの物語も新鮮でおもしろかった。

(二〇一七年度)

他と比較すると一つ一つ物語が大きく違ったり少しだけ違ったりもして、
自分たちが知っていたのはほんの一部だけなんだと比較しながら思った。

(二〇一七年度)

浦島太郎本人の名前や玉手箱の中身まで、話によって全く違った事にとて
も驚きました。今の自分達がほとんど知っている浦島太郎のお話が、つい
二、三百年前までは、こんなにバラバラな形で伝わっていたことに驚きま
したが、それと同時に統一された話以外はほとんど知らない事に少し悲し
さも感じました。

(二〇一七年度)

これらの比較で、「比べる」ということに対する見方が改められた気がす
る。

(二〇一七年度)

各作品で細かい部分が変わっているのは人から人に伝わっていく過程で少
しずつ変化していったからなのかなと考えた。しかし亀がいるいない等の
大きな違いはどのようにして生まれたのだろうかと思う。

(二〇一八年度)

auのCMに出てくる浦ちゃん、
「風土記」に出てくる唄子かと思いま
した。理由は「風土記」の最後で唄子は玉手箱を開けた後、泣きながら歩き
回って歌ったとなっていて、CMの方でも泣きながら歩き回って「海の声」
を歌っていて、また、歌詞が似ていると思ったからです。

(二〇一八年度)

特に自分は作品による亀の違いが印象的でした。亀が出てこない作品もあ
れば、亀が乙女になる作品もあり、とても興味深かったです。

文を読んでみて、調べてみて、内容の捉え方、見方が分りづらいが、他
の班の話だと、言葉遊びや時代の背景、浦島伝説のはなしから連想された
話などが読みとれて、おもしろみがあると思いい、聞いてたのしかった。
(二〇一九年度)

その他、上手に音読できる学生への賞賛や、今回のグループワークや発表に
対する反省、今後発表があったときには頑張りたいという抱負など、発表自体
に対する感想もあった。

『御伽草子』『浦島太郎』の読解も含めたこの授業が学生の思考に少なから
ず刺激を与えたことは、年度末に書いてもらったコメントからも窺える。二〇
一七年から二〇一九年までの後期期末試験において、一年間古典を学んだ中で
特に印象に残った単元とその理由を書かせた。浦島伝説は年度当初に行った授
業でありながら、二〇一七年度十五名、二〇一八年度十六名、二〇一九年度九
名の計四十名が「浦島太郎(伝説)」と回答した⁵⁾。この理由として、以下の
ようなことが書かれていた。

自分の知っている事実がどんどんくつがえっていくところがおもしろかっ
たから。
(二〇一七年度)

小さい頃から誰しもが知っているような話だが、この学習をした時、自分
の知っている「浦島太郎」とのずれがあったのが興味深かった。
(二〇一七年度)

グループワークを行って、自分が知っていた浦島太郎とは違ったストーリ
ーの浦島太郎を知れたり、浦島太郎という物語にいろいろな歴史があると
いうことを知れたのが良い経験になったから。
(二〇一七年度)

誰でも知っているような有名な話だけど、地方によって細部や根本的な部
分が異なっており、自分の知らない浦島太郎が聞けたから。また、発祥場
所から見たら、もしかしたら実在するのかもしれないと考えながらグループワーク
をしたら楽しかったから。
(二〇一八年度)

自分もこの丹後の出身であって、浦島太郎という物語はおおまかな内容は
知っていたが、詳しくは知らなかった。それに、浦島太郎の物語に多くの
種類があり、一つ一つ内容は似ていても、物のあらわし方が違うなど、と
ても興味深い授業だった。
(二〇一八年度)

ベースとなる一つの話が様々な時代や地域で語りつがれてゆき、それぞれの話をよむと時代背景や地域性などが見え、またそれらを比べることに興味を持ったから。

浦島太郎の見方が大きく変わったので、最も印象に残っています。

(二〇一八年度)

高校になってからおとぎ話をくわしくやるとは思ってなかった。実際いろいろな浦島物語があつて考察することが楽しく、小さいころに読んだ話とまったく違ったり、おじいさんにならないパターンもあるのか、と終始楽しかった。

(二〇一九年度)

子どもの頃から読んでいた話であつて親しみがあつたが、様々な展開の話があることを知って驚いた。いろんな時代で内容の違う浦島太郎が書かれていることは多くの人に好かれていた作品なんだと感じた。

(二〇一九年度)

もともと知っていると思つていた物語だったが、授業を通して、浦島太郎の住むところについてなど知らなかったことがあつて、面白く感じた。そしてグループワークでも内容を深められ、様々な書物の浦島太郎に興味を持った。

(二〇一九年度)

グループワークと、その前段階として読んだ『御伽草子』『浦島太郎』を通して、学生たちにとってこれまで「当たり前」だったものを突き崩し、深く考える機会にできたのではないだろうか。後期に行った授業の単元の方がどうしても印象が強い中で、三年間で約八パーセントの学生が一年の最初の授業を一年後の感想に書くほどに記憶に残せたことは、十分に意義深いと考えている。

5・遠隔授業におけるグループワークの試み

二〇二〇年、新型コロナウイルスの影響により、本校では四月中は休校、ゴールデンウィーク明けから遠隔授業を開始した。六月から学年単位で段階的に対面授業を再開し、一年生の遠隔授業は六月下旬まで続いた。

浦島伝説に関するグループワークは、遠隔授業全六回のうち、第三回・第四回で行った。第三回は対面授業での読解作業(グループワーク)にあたる部分、第四回は発表にあたる部分である。発表の代わりに授業担当者が解説を行い、適宜学生を当てて回答を求める形をとった。以下、読解作業と発表解説の手順について説明し、見えてきた反省点と改善策を示す。

5・1 読解作業

まず、第三回の読解作業について説明する。本校では、シートホームルーム(SHR)はMicrosoft Teamsを用いて行っているものの、学生のインターネット環境が科目担当者に周知されておらず、長時間の同時双方向型での授業は専門科目以外ではあまり行われていないようであった。データ通信量、通信速度の問題があり、長時間のアクセスが必要なグループワークは避ける方が無難だと思われた。その上、一年生はまだ顔も合わせたことのない者同士であり、どこまでTeamsの会議機能を使って、双方向の話し合いができるかが不透明であった。これらの状況を踏まえて、今回はグループワークの説明をTeamsで行い、その後Microsoft OneNoteに移動し、文字でのやり取りを主としたグループワークを試みた。

OneNoteは一枚もののキャンバスのような形の入力画面で、クリックしたところに自由にコメントの書き込みができる。共有することで、同時に作業することができ、「作成者の表示」というボタンを押しておく、誰が編集したコメントかが分かる。これにより、OneNote上で文字による話し合いができるのではないかと考えた。

OneNoteにはセクションとページという階層がある。複数のセクションを作成し、それぞれのセクションの中に複数のページを設置することができる。本グループワークでは、浦島伝説の記された作品④⑤①というセクションを作成し、それぞれのセクションに「構成シート」「まとめシート」というページを設置した(次頁図2)。「構成シート」は対面授業での「比較表」にあたる。あらかじめ①④⑤の分析項目を入力する欄を設けておいた(ただし、今回は⑤を「女性の名称・特徴。」と「浦島太郎との出会い」の二つに分け、①④⑤とした)。「まとめシート」は対面授業と同じ「まとめシート」の三つの設問を課した。

今回は、「構成シート」の①④⑤をAさん、「まとめシート」の設問1をBさん、……というように、グループの各メンバーに担当箇所を割り当てておいた。初めてのオンラインでのグループワークで、うまく話しながら進められるかがわからなかったためである。しかし、杞憂で、むしろ手を出し過ぎた感がある。グループワーク中、授業担当者は適宜各グループのページを巡回し、迷っているような会話にはフォローのコメントを書き込むなどしていた。学生の様子を見ていると、担当を割り当てることで、やはり会話のないままそれぞれ

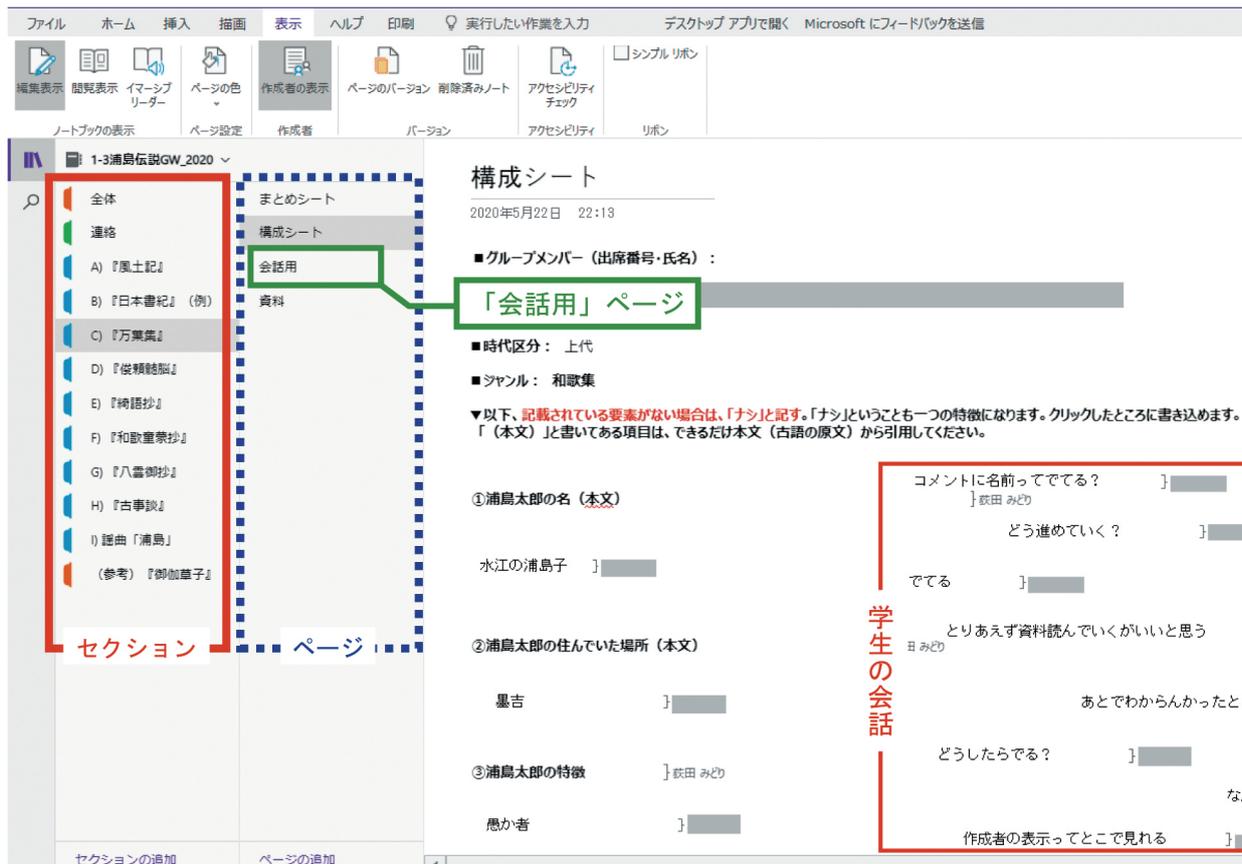


図2 「構成シート」画面の様子 ※学生の個人名はグレーで塗りつぶしている。

5・2 発表と解説
 学生が取り組んだ「構成シート」は、それぞれのページに分かれているため、他作品との比較がしにくい。授業担当者は、翌週までに「比較表」の形で学生の回答を一覧できる表を用意した。これは Excel によって作成し、「全体」というセクションに貼り付けた。

れ自分の担当の範囲をこなすグループもあった。「自分の担当範囲以外も積極的に意見を出し、協力しながら、グループが担当した作品を読み取りましょう。」という指示を出してはいたものの、話しかけにくい雰囲気を作ってしまった。

第四回授業終了後に提出してもらったアンケート(感想)からは、学生たちが制限された中で行う初めてのグループワークに戸惑いながらも、まだ対面していないクラスメイトとの交流に新鮮味と面白さを見出していたことが窺える。一方で、交流がなかったグループの学生からは、個人作業になってしまったことを残念がっている様子が見て取れた。話したことのないクラスメイトに対し、自分から声をかける勇気が出ず、交流できなかった学生の中には、会話して進めざるを得ない状況になれば交流を楽しめたかもしれない者もいる。そうした学生のコミュニケーションの可能性をつぶしてしまったことは反省点である。

上の図2はあるグループの「構成シート」の様子である。当初、学生たちは欄外で会話をし、相談しながら項目を埋めていっていた。そのうち、会話と解答とが見づらくなってきたようで、新たに「会話用」ページを作成し、そのページで会話するようになった。

授業担当者からは、欄外で会話し、その過程を残しておいて良いが、必要に応じて自分たちで「会話用」ページを作っても良いと提案する形をとった。四クラスで授業を行ってみて、授業担当者が「会話用」ページを作ると、そのページで会話しなければならぬという義務感が生まれ、スムーズな会話をしにくそうな印象を受けたためである。作業ページと会話ページが分かれていると、コメントが追加されても気づきにくく、会話が成立しにくいのである⁶⁾。それゆえ、授業担当者はこういうことができるという提示をするだけにとどめ、グループ内でどのように会話を進めるかは学生に任せることにした。アンケートでは、意見交換や話し合いの有無はクラスによりそれほど差がなかったもので、もしかしたらクラスの雰囲気による違いなのかもしれない。ただ、この方法で授業を進めたクラスでは、学生の相談し合いが活発だったように思われた。

翌週はTeamsにアクセスさせ、この表を見せながら、表の抜けている所や誤っている所、注目してほしい部分を、時にはグループの担当者当てて答えさせながら解説を行った。各クラスで作られた表をもとに解説することで、自身の解答を答え合わせすることになると考えてのことであった。

学生には、比較表を見たり解説を聞いたりして、(1)様々な浦島伝説を比較してみ、気づいたことや考えたこと(二百字以上)、また、グループワークを行って試みての(2)通信トラブルの有無や(3)意見交換の有無、(4)感想を入力し提出させたこのうち、(2)と(3)の結果を下図の図3に示した。(2)通信トラブルの有無については、「あった」「ときどき」と回答した学生は約三十五パーセントに上るが、感想を読むと「一人で考えるより楽しかった」などと好意的な意見が多かった。(3)意見交換の有無については、約七十三パーセントの学生が「できた」「それなりにできた」と回答した。「でき

(3)意見交換や話し合いはできましたか？

(2)通信上のトラブルはありましたか？

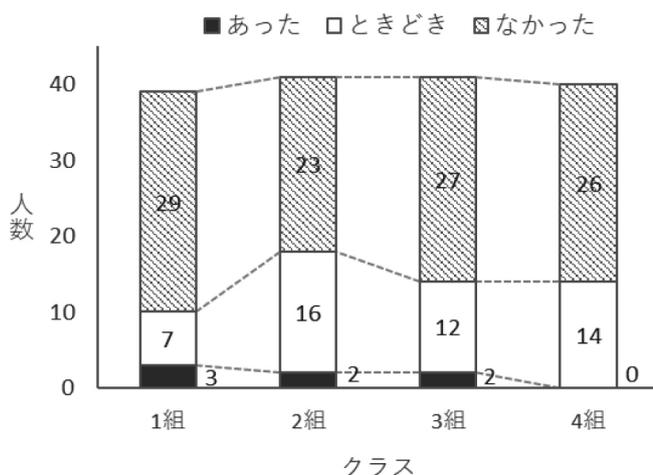
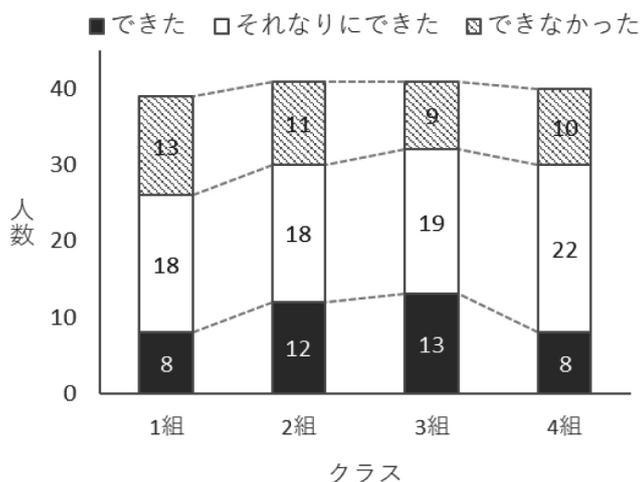


図3 グループワークを終えてのアンケート結果 (2)・(3)

なかった」と回答した学生は、「もし次の機会があったらもっと積極的に頑張りたい。」「難しいところもあったけれど、新鮮で楽しかったです。」などと感想を書いており、前向きなものであった。こちらの指示や仕組みづくりによって、改善の余地はあるだろう。

反省点は、学生に発表してもらった形式ではなく、授業担当者が大部分を解説するだけの授業になってしまったことである。敢えて同時双方向型にしなくても、オンデマンド型で動画を公開する方が学生は自由に止めたり繰り返ししたりしながら聴くことができ、ふさわしかったのではないかと考える。各クラスで学生の回答をもとに比較表を作り、動画を作成するとすると、かなりの時間と労力がかかるが、クラス単位でなく、学年全体として気になる点をピックアップして解説するなど、工夫できる。

加えて、OneNote にこだわる必要がなかったのではと考え始めている。OneNote は自由な位置にコメントを書き込めることを魅力として今回のグループワークのソフトに選択した。しかし、比較表を作成した方が一覽できて分かりやすい。これは改善策として後述する。

5・3 課題と改善策

遠隔授業で行ったグループワークにおいて、先述したように、ソフトの選択に関して検討が必要である。OneNote は自由に書き込みやすい反面、会話をしようとしたときに流れが分かりにくく、煩雑になる。「会話用」ページを設けても、別のページの項目や設問についての話題であるため、同時にそのページを見ながら会話を進めることができない。また、別のページを閲覧しているときに、他者が書き込んでも気づくことができない。

改善策として二点挙げる。一つ目は、Teamsを併用することである。対面したことのない一年生同士であり、会話が弾むか未知数であること、同時に二つのソフトを利用すると難易度が上がるのではないかと考え、今回はすべてOneNote上で文字のみの会話を勧めた。しかし、文字入力に慣れていない学生や、文字だけの会話に限界を感じている学生がいた。また、OneNoteでの会話の難しさから、自主的にグループLINEを作成し、会話はそちらで始めてしまったグループもあった。こうなると、授業中にもかかわらず、学生の考える過程を教員が把握しづらくなる。このようにOneNoteをチャット替わりにすることには限界があるように思われた。

実は三年生の総合国語の授業で、同様にOneNoteを用いてグループワークを

行っていた。これは梶井基次郎『檸檬』に関して、グループごとに設問を与え、意見を出し合い、グループピングしていくというものであった。このとき、初めに Teams でグループワークの説明をしたところ、学生から、自分たちで Teams の会議を開いて話し合いをして良いか質問があった。各グループに任せる旨伝えたところ、ほとんどのグループが会議を開き、メンバーの一人が OneNote の画面を共有して話し合いが行われていった。三年生はグループを九つに分けたが、通信環境としてはそれほど問題なくスムーズにグループワークが行われていたように思われる。確かに三年生は見知った者同士であること、高専三年目で、専門科目でも Teams で授業が行われているように、ある程度の慣れがあった。だが、一年生でもきちんと説明を行えば、同様の方法で話し合いが行えるのではないかと考えている。三年生よりも十分な準備と説明が必要であろうが、端から一年生には難しいと、可能性の幅を狭める必要はなかったのではないだろうか。

改善策の一つ目は、OneNote でなく Excel を利用した作業シートである。Excel は自由に書き込みにくいこと、誰が書き込んだかわかりにくいことを理由に、本グループワークにはふさわしくないと考えていた。しかし、OneNote でグループワークを行ってみて、以下三点により、Excel の方がこのグループワークに関しては作業しやすいのではないかと考えた。

第一に、「変更履歴の記録」である。変更履歴の記録を行うことで、当該セルを更新した人が分かるようになる。さらに、図4のように、一つの項目や設問に対し、メンバーそれぞれの意見を書き込むセル、最終的に採用した意見を書き込むセルを設ければ、一つのセルに同時に複数人が書き込もうとして更新に不具

項目	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	最終意見
①浦島太郎の名						
②浦島太郎の住んでいた所						
③浦島太郎の特徴						
④亀の特徴						
⑤女性の名称。特徴。						

図4 Excel ファイルを用いた「構成シート」例

合が出る危険性を防ぐことができるだろう。

第二に、「Excel」では共同作業を行う上で「チャット機能」が使える点である。この機能だと、回答するセルと会話が別の次元に存在することになるため、同じ画面上で閲覧することが可能ながらも見にくさが軽減され、コメントがあったことにも気づきやすい。別シートで他グループが作業していても問題ないのか、チャット機能を使うならグループごとに別のファイルを作成する必要があるのか等、授業で行うためには試験運用して確認すべき点があるだろうが、選択肢の一つには加えておきたい。

第三に、一覧する「比較表」を作りやすい点である。今回は、OneNote に書き込まれた学生の回答を、授業担当者が新たに作成した Excel の表にコピー&ペーストして、他の作品と一覧できる「比較表」を作成し、Teams 上で学生に見せながら解説していた。しかし、学生の回答を移行するという二度手間な作業が発生している。同じファイルのシート内で別グループが作業できる体制が取れるなら、採用意見を紐づけた集計用のシートを作成しておくだけで、一覧の「比較表」を作成することができる。別のファイルを作成する必要がある場合にも、同じ Excel ファイルであるため、作業シート自体を移行し、関数を当てはめれば、作業はしやすいはずである。

以上のように、Teams を併用して、あるいは Excel を利用したグループワークを提起した。この方法を成功させるためには、グループワークを行う上での丁寧な説明と下準備が必要になる。高専機構では、学生、教職員ともに Microsoft 365 のアカウントが割り当てられ、Microsoft の各種アプリケーションを利用できる環境にある。加えて、舞鶴高専では遠隔授業の基礎となる資料や動画の公開を「Moodle2」を通して行っている。利用できるツールの長所と短所を理解し、吟味し続けることで、オンラインでも対面に劣らない授業を展開できる可能性を持っている。

6・おわりに

浦島伝説の受容に関してグループワークの授業実践と、遠隔授業における試みや改善策を紹介してきた。浦島伝説は馴染み深く、古典に苦手意識を持っている学生でも読める難易度であり、グループワークを行うことで、一人では難しい箇所も協力して意見を出し合うことで考えが深まる教材である。歴史書、和歌、歌論書、説話、謡曲という多様なジャンルの作品に触れる機会にもなる。それぞれが影響し合い、幅広い享受者層によって、読み継がれてきたことを実

感できるだろう。高専生が古典を学習する意義はそこにある。

エンジニアを目指す学生たちは、ともすれば、新奇で簡便な価値に目を向けがちである。しかし、一年次で古典作品に触れ、共通点・相違点を分析し、その背景を検討するという学習行動は、新たな視野を獲得する機会となる。長く読み継がれてきたものは、一定の普遍性を持ち、人々の共感を容易く得ることのできる巨大コンテンツである。これを活かし、昇華させることで、新たな価値が生み出される。そうした想像力・創造力が日本の文化・技術をつくり上げてきたのである。古いものは分断された存在ではなく、現代に連なる人間の所産である。こうした連続性を意識しつつ、違いを検討することは、技術に対する考えを深めるとともに、社会に存在する多様性を認めることにもつながるのではないだろうか。

註

- (1) 『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店、一九八六年
 (2) 『御伽草子』「浦島太郎」の本文は、『日本古典文学大系』岩波書店、一九五八年を参照しつつ、教科書テキストとして学生の分かりやすさに配慮して、適宜表記を改めたり送り仮名を補ったりした。

(3) 古典作品を読む上で基礎となる助動詞「き」「けり」「ず」「ぬ」が用いられ、「ぬ」の識別を説明できる要素が盛り込まれている点も、教材として有意義である。

(4) 浦島伝説の変遷については、三浦佑之『浦島太郎の文学史 恋愛小説の発生』五柳書院、一九八九年、林晃平『浦島伝説の研究』おうふう、二〇〇一年、三舟隆之『浦島太郎の日本史』吉川弘文館、二〇〇九年などが詳しい。

(5) 各年度一年生約一七〇名（一クラス四十名強×四クラス）で、三年間の後期末試験受験者は五〇五名であった。

(6) 一クラス目に授業を行った際には、欄外で会話すれば良いと考え、そう指示した。しかし、それでは見にくくなると考えた一グループで「会話用」ページを独自に作成し始めた。確かにこれは良い考えと思いい、二クラス目では授業担当者が各グループに「会話用」ページを設けたところ、なかなかスムーズな会話や作業に発展せず、それぞれ任せられた担当の作業を淡々と進めるグループが多かった。もちろんクラスの雰囲気依るところもあり、一概には言えないが、三クラス目・四クラス目は、会話の仕方について提示だけで、方法は学生に任せたところ、学生が試行錯誤しながらグループで作業を進めていく姿が多く見られた。

(2020. 12. 11 受付)

A report on Japanese classic class comparing various Urashima legends:

The practice of face-to-face classes and remote classes

Midori OGITA*

*Corresponding author: m.ogita@maizuru-ct.ac.jp

Abstract: This paper reports on practices of Japanese classic classes that compare aspects of acceptance of the Urashima legend. It is based on three years of face-to-face classes from 2017 to 2019 and remote classes in 2020. The purpose of this paper to review the meaning of Japanese classic classes and to show the possibility in remote classes.

Key words: Urashima legend, Japanese classic class, group work, class practice, remote classes